【論文】

人口一人の集落における地域づくりと関係人口の創出
－石川県加賀市山中温泉大土町を事例に－

原田　桃子

Ⅰ　序論

2022年４月１日現在，日本の全市町村のうち51.5%にあたる885市町村は過疎市町村とされている[1)]．過疎化や高齢化の進行は集落維持機能の低下を招いており，特に生産条件および生活条件の厳しい中山間地域などでは，存続が危ぶまれる事態に直面している集落も少なくない．2005年前後からはいわゆる「田園回帰」が注目されるようになったが，一部の地域を除くと農山漁村地域の人口回復や人口減少の抑制につながっているとはいえない．交流人口の拡大も目指されてきたものの，地域の維持に対する効果は限定的であることが徐々に認識されるようになってきた（作野 2016）．このような状況を打破するために提唱された概念が「関係人口」である．

政府が関係人口について公式に取り上げた2017年４月公表の『これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会　中間とりまとめ』[2)]では，「長期的な『定住人口』でも短期的な『交流人口』でもない，地域や地域の人々と多様に関わる者」と関係人口を定義しており，人口減少や高齢化が先行する農山漁村地域における多様な地域づくりの担い手として，その増加と関係性の維持を訴えている．この関係人口に関する研究は，近年増加してきているものの，依然として発展途上にあるといえる．

そこで，本論文では人口が著しく減少した集落の持続可能性を考えるために，定住という形態に囚われない訪問型の関係人口による地域づくりと，それをめぐる関係者の意識を事例調査から明らかにする．事例として選定したのは，現在定住人口が一人である石川県加賀市山中温泉大土町である（図１）．

本論文の構成としては，Ⅱで対象地域である大土町の概要と調査方法を説明し，Ⅲでは大土町における集落運営の実態とそれに関与する集落にルーツを持つ他出者について明らかにする．Ⅳでは，そうした集落にルーツをを持たない地域外の人々を関係人口として大土町の地域づくりに結び付ける活動をしている団体について明らかにする．そこまでの内容を踏まえてⅤでは，大土町の地域づくりをめぐる定住者，他出者，そして大土町と関係を持とうとする集落外の人々の意識を明らかにし，Ⅵで総合的考察を行う．

Ⅱ　対象地域と調査方法

１．対象地域

大土町は，石川県加賀市東南の山間部に位置し，現存する荒谷町，今立町，杉水町と共に東谷地区を構成する集落である．冬は降雪量が多い．東谷地区は，藩政期より製炭で栄えたが，明治期以降は製炭業の衰退や大土町における大火，小中学校の相次ぐ統廃合などにより，戸数，人口共に減少し[3)]，大土町に至っては2012年に一時無住集落化した．大土町ではその後，就職のために集落を離れた二枚田氏[4)]が，あらためて大土町の良さを感じたことで2016年に再び定住するようになって以降，集落人口一人を継続している．

大土町および東谷地区には，食料品店や生活用品店は存在しない．最寄りの商業施設は，約19km離れたJR北陸本線加賀温泉駅に隣接するショッピングセンターであり，現在大土町と加賀温泉駅を結ぶ公共交通機関はないため，自家用車等で約30分の時間を要する．このショッピングセンターには，食料品，家具，家電，衣類，書籍等の専門店が入っており，日常の生活に必要なものは一通り揃えることができる．医療機関に関しても，加賀温泉駅より徒歩３分程度に位置する加賀市医療センターが最寄りである．

東谷地区は，2011年11月に，国の重要伝統的建造物群保存地区（以下，重伝建地区）に指定された．「加賀地方の農家の特徴を発展させた近代以降の伝統的建造物群が，石積み，石造物，樹木，旧道，水路，河川等の工作物や自然物と一体となって独特な歴史的風致を形成しており，我が国にとって価値が高い」と評価されている[5)]．東谷地区には，重伝建地区の指定に際して調査等を行い，指定後も重伝建地区に関わる活動を中心に地区の活性化に取り組む団体が存在する（加賀市教育委員会 2019）[6)]．大土町には，赤瓦を利用した切妻，入母屋の造り，煙出しの小屋根を持つことなど特徴的な家屋10戸が存在[7)]するとともに，棚田の景観が特徴である（写真１）．

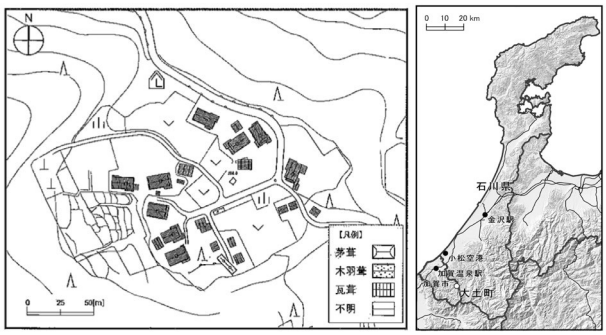

図１　石川県加賀市山中温泉大土町

（左図は山中温泉ひがしたに地区保存会（2007）より転載．右図は地理院地図陰影起伏図をベースに筆者作成）

写真１　夏季の大土町

（二枚田氏より提供）

それらの維持管理（加賀市に寄贈された１戸を除く）や集落行事などの運営は，二枚田氏のほかに，大土町に家屋や土地を持ちながら集落外に居住している集落出身者８名やその親族ら（以下，他出者）によって営まれており，集落自治のための団体としてそれらの人々からなる大土町町内会が存在する．さらに，現在大土町には地縁的・血縁的な関係を持たない人々が集落の外部から訪れ，景観保全に関わるボランティア活動や二枚田氏との交流がみられる．これは，特定非営利活動法人NICEによる国際ワークキャンプというボランティア・プログラムによるものであり，二枚田氏および一般社団法人おおづちが集落側の受入れ主体である．

２．調査方法

本研究で用いた主な調査手法は，大土町の定住者である二枚田氏と集落に来訪する人々，集落自治の団体および集落の地域づくりに関わる団体を対象としたヒアリング，半構造化インタビューである．これらの調査は，筆者が大土町に滞在した2023年８月17日から23日および同年10月８日から９日に実施した．

大土町に家屋・土地を持つ二枚田氏および他出者に対しては，集落への関わりと意識について明らかにするために，１人当たり30分から１時間程度の時間で話をうかがった．「家主の年齢」「大土町を離れた理由」「家屋を残す意思」「集落に対する想い」「今後の大土町について考えること」は全員に，「現在の居住地」「大土町への来訪頻度・目的」については他出者に聞き取り，事項ごとに結果をまとめた．また，大土町に来訪するボランティアとその活動に対する「とらえ方」「関わり方」「求めること」などの意識についても全員に調査した．なお，直接調査できた他出者は４名であり，残りの４名に関しては前記の４名から間接的にデータを得た．他出者８名は全員が町内会の会員であり，町内会では各家の意向などを共有していることによる．他出者４名の語りについて以下で引用する際には，識別番号を割り振り記載する．

大土町の国際ワークキャンプに参加するボランティアに対しては，筆者が大土町に滞在した期間に同じく大土町に滞在していたボランティア参加者を対象にインタビューを行うとともに，過去の参加者に対してオンラインツールを用いてインタビューを行った．合計で18名から回答が得られた．主な質問内容は，「大土町のボランティアへの参加理由」および参加回数が２回以上の人には「大土町を再訪した理由・目的」を聞いた．この18名の語りについて以下で引用する際には，識別記号としてアルファベットを付して記載する．

集落の団体および集落の地域づくり活動に関わる団体に関しては，活動内容やこれまでの成果と課題などについて，筆者の大土町滞在中に団体関係者にヒアリングを行うとともに，文献調査を行うことで相互の結果を補完した．

Ⅲ　大土町における集落運営と他出者の関わり

１．他出者の集落への関わりと存続に対する意識

１）他出者の来訪状況とその要因

調査時点における各戸の家主の年齢は，70代が７名（うち１名は二枚田氏），60代が１名，40代が１名であり，70代が大部分を占める．彼らの多くは，子どもの頃に大土町に住んでいた人々であり，親世代から家屋等を受け継いでいる．二枚田氏を除く８名の居住地は，大土町を除く加賀市内と石川県外が各半数である．他出者の来訪頻度は，しばしば来訪する人から年に数回訪れる程度の人まで差が大きい．家族や友人らと共に来訪する人がいる一方で，１人で来訪する人もいる．来訪の時期は，お盆の頃が最も多い．来訪の目的は，草刈り等を含めた家屋および所有地の管理以外には，お盆の墓参りとする人が多い．春には田植えのために来訪する人もいる．

他出者による大土町への来訪の促進要因については，以下の３点が指摘できる．第一に，重伝建地区への指定

であり，家屋等の保全に関わる責任を自覚させ，大土町に通う要因になっている．第二に，湧き水や山菜等をはじめとする地域資源が，集落への来訪を促している．そして第三に，地域に対する思い入れや懐かしさといった感情を「愛着」と表現するのであれば，その愛着を抱いていることが，転出後も集落との関係性を維持させる要因につながっている．

２）今後の家屋の維持管理に関する意思

家屋について，９戸中７戸の家主（うち１戸は二枚田氏）は明確に残していく意思を持っていた．そのうち１戸の家主は,「退職するまでは無理だが，本当は今すぐにでも大土へ戻ってきたい（１)」と考えており，その家族も帰ることに前向きなことから，再び大土町に居住する可能性が高い．現在，明確な定住の意思や予定はないものの，家屋や所有地の管理のために定期的に訪れているケースもみられることから，今後も「通い」により家屋が維持される可能性を指摘できる．また，ほかの家主においては，以前から家屋を残そうとする前向きな意思があったものの「家がボロボロで心が折れかけていた矢先，他県から趣味をやるために家を借りたいという人が訪れたため,貸出しを行うことを検討している(２)」という．

一方，２戸の家主は，家屋を残す意思はあまりなく，家族も大土町の家屋に興味を示していないという．そのうち１戸の家主は，後述する一般社団法人おおづちによる家屋の借上げを検討している．同法人によると「買取り」ではなく「借上げ」を働きかけた理由は,「買い取ることもできるが，そうしてしまうと大土との関係性がなくなってしまう．借上げというかたちを取り，賃料を払い続けることで，大土との関係性をずっと保っていてほしい」からと述べる．家主もこの考え方には納得しており，現在は家屋を使用できる状態にすることを目指し，後述するボランティアなどの力も借りながら内部の清掃等を行っている．もう１戸の家主も，現在貸出しを検討しているという．

３）現在および今後の集落に対する考え

現在の大土町に対する意識として，市街地からのアクセスや自然環境の良さに関する回答に加え，先に述べたように生まれ育った土地への懐かしさに関する言及があった．その一方で生活する上での寂しさや不便さについての意見も聞かれた．また，大土町から転出した理由として就労機会の確保を挙げた人が最も多く，大土町での就労についても唯一の定住者である二枚田氏からは「いくらリモートワークが進んだとはいえ，やはり大土での仕事はハードルが高いと思う」といった意見が聞かれた．二枚田氏は既退職者であるため支障はないが，集落に就労の場がないことは集落での定住を困難にさせる大きな要因になるといえる．また，加賀温泉駅方面に通勤することを考えた場合，それであれば駅周辺に住んだ方が便利との考えがあるという．集落に対する思い入れや懐かしさといった理由だけでは定住に結び付き難いことを指摘できる．

今後の大土町に関しては，他出者のすべてが集落の存続を願っているという．特筆すべきは，大土町の景観を変えたくない点が共通していることである．また，集落の存続のために自身ができることとして「大土を残すために手伝いできることはしたい（２)」という人がいる一方で,「子どもや孫が通いで来て，時々でも手入れをしながら続けてほしい（１)」のように，次世代に対して期待を抱いている人もいた．なお，二枚田氏からは,「外国人や若者など，いろんな人に来てほしい」として，後述するボランティアの受入れと関係した回答が得られた．

２．大土町町内会の活動

１）団体概要

大土町町内会は，調査時点において現存する10戸の家屋のうち加賀市に寄贈された１戸を除く９戸の家主９名により構成されている．ただし居住地等の制約により，実質的に町内会の活動に参加できるのは二枚田氏および加賀市内に住む家主とその親族をあわせた６・７名である．町内会長も活動に参加できる家主の中から選出されている．

大土町の郷土資料（加賀市山中温泉東谷地区保存調査準備会 2007)によると，かつては各家の戸主が参加する寄合が村の最高意思決定の場であり，重要な事項はすべてここで申し合わせが行われていたという．現在の町内会では，年に１度の終（しまい）寄合が３月の下旬に開かれ，その日の午前中に当年度の町内会を締めた後，午後からは新たな町内会長への引継ぎと同時に次年度の町内会が開かれる．寄合は参加者の居住地に配慮して，大土町外の加賀市内で開催されている．可能な会員が参加する形態を取っており,寄合の場で負担金が徴収される．参加できない会員は，後日負担金を振り込むことになっている．

２）活動内容と課題

町内会の活動内容として，道の修繕，草刈りとそれらの費用の徴収，役所との連絡，集落の祭りや復興祭りの指揮などがあげられる．中でも冬季明けの側溝清掃や集

落の奥まで続く山道の草刈りを行う「道ざらえ」「道刈り人夫」は，集落の維持にとって重要な作業である．東山地区のまちづくり協議会が作成する広報を配布する役割も担っている．かつては集落の活動に参加した人には１度につき6,000円が町内会から支払われ,その費用を不参加者が負担する仕組みがあったが，現在では参加者が限定的となったため，そのような仕組みはないという．

復興祭りは，1937年５月の大火からの復興を記念する祭であり，2003年から毎年５月に集落内の大土神社を会場に近隣集落の住民も招いて執り行っている.これまで,祀り以外に町内会が負担して飲食を提供するなどしてきた．近年は，近隣集落の高齢化や新型コロナウイルス感染症の蔓延により参加者は減少している．

Ⅳ　大土町の関係人口を創出する団体

大土町では，上記のように二枚田氏と他出者により集落運営が行われている一方で，直接的に地縁的・血縁的な関係を持たない人々が訪れ，景観保全に関わる活動や二枚田氏との交流がみられる．後者の取組みを主導しているのは，二枚田氏と連携する特定非営利活動法人NICEおよび一般社団法人おおづちの２団体である.本章では,両団体の取組みとこれまでの成果および課題について明らかにする．

１．特定非営利活動法人NICEの活動

１）団体概要

特定非営利活動法人NICE（以下，NICE）は，国際ワークキャンプというボランティア・プログラムを企画運営する団体である．国際ワークキャンプとは，国内外を問わず地域で求められる仕事を，国内外から集まった参加者が地域の住民と共に原則無報酬で行うものであり,「合宿型のボランティア」に位置付けられている．ボランティアは，NICEを通じて希望するプログラムに申し込み，日数に応じて定められた参加費をNICEに支払うことで，「お客様ではなく住民の一員として」地域の中に入り込む．支払われた参加費は，主にNICEおよびNICEと提携する海外のボランティア団体の運営費に充てられる.一方,参加者の滞在期間中に発生する費用(光熱費や食費など)は，原則受入れ側の地域が負担する．大土町では2013年より二枚田氏とNICEが提携し，ボランティアを受け入れてきた．

２）活動内容

国際ワークキャンプの形態の一つに短期ワークキャンプがある．これは，参加者が１～２週間ほど大土町に滞在してボランティアで作業にあたるものであり，受入れの当初から年に４回程度開催している．また，短期ワークキャンプの参加者からの「仕事の休みの日などに気軽に関わる仕組みをつくり，より大土町に関わる人を増やしたい」との声を受け,週末ワークキャンプも追加した．これは，４月から11月に毎月１回，土日の一泊二日または祝日を含めた二泊三日の日程で開催する．各回の定員は約10人と定められており，その都度受入れ状況や参加希望人数にあわせて調整する．さらに，2018年からは大土町にまた、１人か２人のボランティアが２ヶ月から３ヶ月程度滞在して活動する中長期ワークキャンプを不定期に開催している．

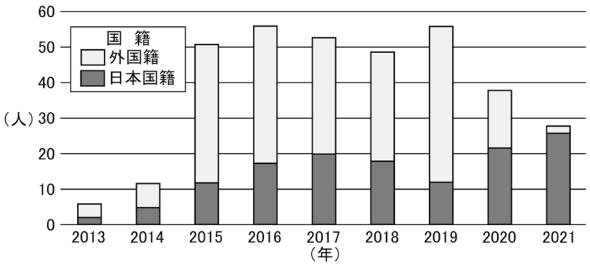

図２　短期ワークキャンプ参加者数の推移

（NICEより提供を受けた資料に基づき筆者作成）

各回のスケジュールや活動内容はあらかじめ決められていないため，その都度ボランティアのリーダーや二枚田氏らを中心として自主的に地域課題を見付け，行動することが求められているが，主に行われる活動は，棚田や畑，家屋の維持・管理，集落内の草刈り，雪下ろし，加賀市や隣接する小松市の学校との国際交流などである．時期別にみると，８月は農作業，９月は稲刈り，２月の初旬は雪かき，３月は農作業の準備が中心である．中でも棚田には農業機械を入れることができないため，ボランティアによる人の手が必要とされている．

３）これまでの成果と課題

NICEを介した大土町の短期ワークキャンプ参加者の累計は,開始以来2021年までで国内外から合計349人に及ぶ（図２）．また，参加後，個人的に二枚田氏と連絡を取り合い再訪する人も多数みられる．短期ワークキャンプの参会者は2015年から2019年まで年間50人程度であり，週末ワークキャンプは2015年から年間60人程度，中長期ワークキャンプの参加者は2018年から年に２人程度である．それに加えて個人的に来訪するボランティア等が月５人程度いる．ゆえに，ボランティアは多い年には年間180人近くが大土町に訪れている計算になる．

大土町側からみるとボランティアの存在は貴重な人手となるばかりでなく,ボランティアによるSNSや口コミは

集落の情報発信となり広告の効果をもたらしている．また，時にはタイムカプセルを集落で埋めたり，ヨモギ団子を作ったりすることを事業化するといった若者のアイデアを実行するなど，集落側の新たな取組みのきっかけに結び付くこともある．二枚田氏は,「若い子たちがここへ来てくれて，交流することが，私自身の活性化になっている．それが大土という地域の活性化の一つでもあると思う」と述べており，ボランティアとの交流自体が二枚田氏および大土町に活気をもたらしていると評価している．来訪するボランティアにとっても，後述するように大土町に残る自然や文化に非日常的な魅力を感じると同時に，集落に集う人々との交流が大きな刺激となっている．

その一方で，次の課題もあるという．新型コロナウイルス感染症の影響を受ける以前の2019年時点では，ボランティアが大土町に滞在した期間は年間60日程度にとどまった．その受入れに10回に及ぶ短期および週末ワークキャンプが実施された．2020年からは新型コロナウイルス感染症の世界的な流行を受けワークキャンプの回数は減少したが，１回ごとに二枚田氏には受入れ期間の前後にもさまざまな業務が発生しており，小さな負担ではないと考えられる．

２．一般社団法人おおづちの活動

１）団体概要

一般社団法人おおづちは，2020年６月に設立された団体である．先に述べた二枚田氏が個人でボランティアの受入れを担う体制から団体としての活動に移行することで，社会的な信用を高め，助成金などの獲得を進め，より幅広く地域の活動に取り組むことを目指すという，二枚田氏と同氏の弟による構想に基づいて設立された.「自然・文化・歴史・地域資源の調査研究を含めさまざまな体験活動や商品開発の企画販売を推進し，青少年の交流や体験学習から次世代の担い手を育成し，持続的な社会づくりを目指し，中山間・農村・漁村への支援と地域活性化に寄与する」[8]ことを団体の目的としている．

同法人は，代表理事１名，理事２名，幹事２名の計５名と会員により構成される.代表理事は二枚田氏が務め，理事１名と幹事２名を大土町出身者（他出者），理事１名をNICEの職員が務めている．会員は年会費を支払い議決権を持つ正会員と，月会費を支払い議決権は持たない賛助会員に分かれている．2021年12月時点で，正会員は16名，賛助会員は10名であった．同法人の主な収入源は，次に述べる週末ワークキャンプの参加費と観光客の受入れにともなう収入，そして寄付である．

２）活動内容

同法人では，主に週末ワークキャンプの実施と，市内の旅館２軒および外資系旅行会社１社を通じた観光客の受入れを行っている．

現在，週末ワークキャンプの活動は，同法人が主体となっている．同法人が中心となってからの週末ワークキャンプの参加者は，NICE主催の国際ワークキャンプの参加経験がある人が全体の３分の１から２分の１を占めており，週末であれば都合をつけやすいという理由から，気軽に参加する人が多いという．

観光客の受入れについてその対象は，主に外国人である．同法人と提携する旅館および旅行会社が，大土町への観光プランを企画し，それに興味を持った外国人観光客が，主に降雪がない時期（３月から11月）に，通訳兼コーディネーターと共に自家用車やマイクロバスで大土町へ訪れている．旅行会社経由の申込みは，新型コロナウイルス感染症の拡大を受けた新規入国制限が緩和されて以降,約１年で８件である.旅館経由での受入れ数は，多い月で約10組である．観光客のボリュームゾーンは50代夫婦であり，時にハネムーンとして訪れる夫婦や家族連れで訪れる観光客もみられる．

外国人観光客が訪れると，二枚田氏が主に大土町内を２～３時間程度かけて案内している．観光客の興味や希望にあわせて案内の内容が変更されることもある．二枚田氏は，大土町内を案内する際に「リゾート地のようにきれいにつくられたものではなくて，本当に自然な，ありのままの大土を見せること大切にしている」と述べており，旅行客もそれを楽しみに訪れているという．

３）これまでの成果と課題

大土町へ訪れる外国人観光客の多くは，東京都，京都府，大阪府に加えて石川県金沢市を訪問する途中に加賀温泉駅から大土町へ来訪している．加賀温泉駅は，小松空港や金沢駅からアクセスが良いため，飛行機や新幹線で移動する旅行客にとって立ち寄りやすいという．さらに加賀温泉駅からの所要時間を考えても大土町の立地条件は，インバウンドの観光客を見込むことができると考えられる．また，前述のように外国人観光客の受入れは同法人の収入確保につながっているが，大土町では観光地としての開発は行っていない．集落の景観を損なわないかたちで，それが観光資源となり収入源が確保されているといえる．

代表理事の二枚田氏は，こうした大土町の条件を活かして，さらに他団体からの支援や企業とのつながりを得たいと考えている．ただし,「そのプレゼンテーションの

仕方などがわからない」として課題意識を持っている．同法人には居住地が遠方の会員も多く，実際に活動できる人が不足している現状や，今後の活動における関わり方についても課題である．ほかには，2023年度にNICEとの共催から10年経ったことを記念した「10周年記念ライブ配信」をSNSを通じて行ったが，2020年以降は新型コロナウイルス感染症の蔓延から特に対面でのイベントの開催が難しくなっており，ボランティア・観光客受入れ以外の活動はほとんどできていないことも課題である．

Ⅴ　ボランティア参加者の意識と地域住民のとらえ方

本章では，①大土町の国際ワークキャンプに参加するボランティア，②加賀市内に居住する他出者もしくはその親族，③唯一の定住者である二枚田氏の３者を対象に，この集落で進められている地域づくり活動をめぐる関係者間の相互の意識について明らかにする．なお，関係人口の定義に従えば，上記の①と②は関係人口に該当する．ただし，大土町において②は，町内会の会員であり，集落運営に関与している人々であった．ゆえに，②は「広義の地域住民」としてとらえていくことができる．

１．ボランティア参加者の意識

１）ボランティアへの参加理由

調査対象となったボランティア参加者18名の年齢は10代から30代であり，国籍は日本国籍が16名であった．外国国籍の２名は，アメリカとドイツからの参加者であった[9]．

調査の結果，これらのボランティア参加者が大土町へ訪れた理由は，「ボランティア自体に関心があった」「知人からの紹介・口コミ」「自然豊かな場所へ行きたかった」「国際交流がしたかった」「その他」の五つに大別されることが明らかとなった．

最も多く回答された理由は「ボランティア自体に関心があった」である．特に，「もともとNICEの会員でほかのボランティアにも行っていた（ａ）」「ボランティアを探しているときにNICEを見付けて，ちょうど募集していたから（ｏ）」というように，NICEとのつながりの中で大土町のワークキャンプを知ったことが，参加の契機になっていた．また，「もともとほかのボランティア団体に所属しており，ボランティア自体に関心があった（ｅ）」というように，すでにほかのボランティア団体において活動している人々の存在も確認された．

続いて多かった理由は，「知人からの紹介・口コミ」であった．「大土のボランティアに参加したことがある人に勧められた（ａ）」「ほかのボランティア団体で出会った友人が誘ってくれた（ｉ）」というように，もともとボランティアへの関心が高い人々の間でNICEの活動や大土町のワークキャンプの情報が共有されており，それが参加の契機となっていた．ほかには，「もともと大土のワークキャンプに参加していた恋人に連れられてきた（ｎ）」というケースも確認された．

また，「田舎っぽいところへいってみたかった（ｅ）」「自然豊かな場所へ行きたかった（ｇ）」「普段ビルばかりの街で生活していると，時々急に自然豊かな場所へ行きたくなる（ｃ）」という回答も得られた．これらの人々にとっては，非日常としての「田舎暮らし」体験や自然の豊かさが大土町への来訪理由の一つになると推察される．さらに，外国籍の参加者からは「日本らしい原風景に興味があった（ｇ）」という意見も聞かれ，大土町の自然が豊かな「日本らしい」景観が参加目的の一つになる事例も確認された．そして，「国際交流をしたかった（ｋ）」というように，NICEが国際ボランティア団体であるがゆえの海外に広がるネットワークがボランティア参加の理由に結び付いている．

ほかには，「人口一人というところに興味を持った（ｃ）」「人口一人の集落をみてみたいと思った（ｉ）」というように，大土町が人口一人であることへの興味や，「北陸自体行ったことなくて行ってみたかった（ｄ）」など行ったことのない場所への興味，「農業に興味があった（ｉ）」「『農業 ボランティア』で検索したら出てきた（ｐ）」というように農業自体への関心が理由として挙げられた．大土町でのワークキャンプは，田植えや脱穀作業をはじめとする稲作や草刈り，農作業が中心となるため，農業に関心を寄せる人々にとっては自身の希望に合致した作業を行うことが可能である．また，「大学入学までに時間があり，何かしたかった（ｃ）」「家から近かった（ｌ）」といったように，時間的・距離的な都合を理由に挙げた参加者もみられた．特に，数日程度の週末ワークキャンプは，長期間の休暇を取り難い社会人などにとって参加のハードルが低いと推察される．

２）大土町に再訪する理由および目的

大土町のワークキャンプに２回以上参加した人を対象に再訪理由について質問した．その結果，再訪理由は「人とのつながり」「二枚田氏に会うため」「大土町の自然環境の良さ」「その他」に大別されることが明らかとなった．

「人とのつながり」を理由に挙げた人の中には，「出身や年齢など全然違う人に会えるのが面白い（ｋ）」「ここに来ればいろんな人に出会えるから（ｒ）」といったように，新しいつながりを求める人と，「人生相談できる人が

いるから（ｏ)」「過去の参加者とのつながりがあり，誰かが来ていたりすると自然と連絡を取り合って集まる（ｑ)」のように，すでに大土町でできたつながりを理由に再訪する人がいた．また，その両方に該当する人も確認された．人とのつながりの中でも,「二枚田氏に会いにきているみたいなもの（ｈ)」「二枚田氏が頑張っているのを手伝いたい（m)」といったように，二枚田氏に会うことを目的に再訪する人も多くみられた．二枚田氏の存在は大きな影響力を持っていると考えられる．

「大土町の自然環境の良さ」に関する回答は,「違う季節の大土の様子をみてみたい（ｄ)」「四季を感じに来ている（ｊ)」といったことからわかるように，四季がはっきりしている大土町に興味を抱く人々が存在する．また,「自然豊かなところが好き（ｒ)」「リフレッシュのため（ｒ)」という意見も聞かれた．大土町の自然環境自体が,特に都市部で生まれ育った人々やそこに暮らす人々にとって，魅力のあるものとしてとらえられていることがわかる．

ほかには,「こんな場所ほかにないと思うから（ｄ)」「１回では到底大土のことを知りきれないから（ｅ)」というように集落自体に興味を抱く人や,「学生たちが頑張っているのを応援したい（m)」というようにボランティア参加者を応援するために訪れる人,「なんとなく（l)」「なぜかは理由がわからないが，ここには自然と人が集まってくる（m)」など明確な理由はないものの再訪する人々が存在することが明らかとなった．

以上を踏まえると，ボランティアの多くは，初めから集落の維持のみを目的に来ているわけではなく，もとよりボランティア自体に関心があったことや，自己成長や自己実現のために大土町を訪れていることがわかる．また,活動を通じて集落の自然資源および文化に触れたり,二枚田氏との交流が行われる中で集落への興味関心や愛着が高まっており，その思いが「さらに関わりたい」「継続して関わりたい」という意識に結び付いたりしている．すなわち，大土町へのボランティア参加者の中には，地域課題の解決と自己成長の各々の意識があると考えられる．

２．他出者のボランティア受入れに対する意識

１）ボランティア参加者との関わり方

大土町の他出者によるボランティア参加者との関わり方は,「ボランティアと関わることは基本的にない（２)」「来たときは顔を出す程度（４)」「何かを一緒にするといったことはない（４)」といったように，関わりがあったとしても活動を共に行うことは基本的にないことが明らかとなった．また,「若者たちの邪魔をしないようにしている（３)」というように，あえてボランティア活動とは距離を置くようにしている他出者も確認された．大土町に通っていても定住していない他出者にとっては，ボランティアと接する機会自体が極めて少なく，集落に訪れた際も特に交流することなく帰る人々が大半であった．中にはボランティアが活動している際に顔を出す他出者も確認されたが，それは主に二枚田氏に会うためであるという．

２）ボランティア受入れに対する考え方

他出者のボランティア参加者の受入れに対する考え方としては,「よそにないものを，安全面さえあれば自由に何でもやってほしい（３)」「これが大土の一つの個性（３)」と積極的に評価する人や，主に景観の維持について「いろんな人が集まって力を貸してもらえれば（２)」「若い力に託します（２)」と前向きにとらえている人の存在が確認された．その一方で「自分が直接関わることはない（１)」と答えた人もいた．

また，ボランティア参加者の活動に対して「景観を変えたりはしてほしくない（１)」という意見も聞かれた．先に述べたように,「このままの景観が残ってほしい」と考える他出者が多い．実際に，大土町におけるボランティアの活動は，景観を大きく変えるような開発をともなうものではなく，石垣や棚田の整備といった修景を基本にしているからこそ，ボランティア参加者の存在は，広義の地域住民である他出者にもおおむね受け入れられているといえる．

３．定住者のボランティア受入れに対する意識

二枚田氏は，ボランティア参加者に期待することについて,「大土みたいな過疎地が日本に沢山あるから，国内のほかの地域にも行ってほしい．いろんな人と話したり,友だちをつくる,そういうことは過疎地でも沢山できる．そういう機会を沢山つくってほしい」と述べており，大土町以外にも同様の課題を抱える地域への関心を持ってほしいとの希望を持っている．また，ボランティアはさまざまな国から参加してくるため，時に言語が障壁になることもあるが，二枚田氏はほかのボランティア参加者を通じてコミュニケーションを取ったり，受入れ主体としての思いを伝えたりしている．「言葉は理解できずとも,不思議と通じる何かがある」と語り，これまで語学の壁により特段不便さを感じることはなかったという．

二枚田氏は，これまでの活動を「『よくやるわ』と言われたこともある．でも楽しくやっている，だから負担感

はない．ちょっとした思いつきでやったこと」と振り返り，さらに以下のように語った．

「NICEとの共催から10年経った今，大土がどんどん素敵な場所になっていると感じる．初めはどうなるかなんてわからなかった．受け入れ当初は大土を後世につなぐため，せっかくの機会だからやってみるかという軽い気持ちで活動を始めた．でも，今の大土は若者がいろんな人とつながる機会になれている．ここに来れば，相談相手を見つけられたり，年齢や出身，国籍の違いといった普段は出会うことのない人たちと出会える．特に社会人にとっては，つながりをつくれる一つの貴重な場所ではないだろうか．学生にとっても人生の先輩や外国人の子たちから話が聞けるのはいい刺激になると思う．沢山刺激を受けて帰ってほしい．その場を残したい，守りたいと思うようになった」．

現在では集落の維持という目的以上に，ボランティア同士のつながりとその関係性が創出される場としての大土町を残したいという想いで活動を続けるようになったという．受入れ側に，参加者に対する理解や配慮，そして受入れ準備等の負担を考慮してもなお活動を続けようとする「ボランティア精神」があるからこそ，大土町に関係人口を惹き付け，活動が成り立っている側面があるといえる．

Ⅵ　総合的考察

１．大土町における地域づくりの実態

現在定住人口が一人である大土町では，これまで，唯一の定住者である二枚田氏と広義の地域住民である集落に通う他出者，そしてその両者で構成される町内会の活動によって景観の保全や集落機能が維持されてきた．他出者の来訪の促進要因については，加賀市の中心部や現居住地からのアクセスの良さに加え，重伝建地区への指定，地域資源があること，そして集落への愛着であることが確認された．しかし，町内会の活動に実質的に参加可能なのは二枚田氏および近隣に住む他出者とその親族に限られており，恒常的なマンパワー不足が指摘される．とりわけ彼らの多くは70代以上であり，今後は地域活動の衰退や担い手のさらなる減少が懸念される．

以上を踏まえ，大土町の地域づくりにおいては関係人口による補完が今後も期待される．

２．大土町における地域づくりの展望

大土町には，関係人口としてとらえることができる多様なボランティアが入り込んでおり，二枚田氏とそれら外部からの来訪者との交流，および来訪者同士の交流が生まれている．外部から来訪する人々にとっては，地域で活動していくことが自らの興味を深めたり，さらなる関心を持つきっかけになったりすることに加え，集落に集うさまざまな人との交流によって大土町が自己成長や自己実現につながる場になっている．また，活動や二枚田氏との交流をきっかけに集落への興味や愛着を抱き，その思いが「さらに関わりたい」「継続して関わりたい」という意識に結び付くことで，来訪者は自身の関心を満たしながら地域課題の解決も図る関係人口として，地域の維持に携わることにつながっている．宮口（2007）の「地域づくりというのは時代に応じた新しい価値をつくり出すことだ」「時代にふさわしい価値を内発的につくり出し，地域に上乗せする作業」という言葉を借りれば，こうしたコミュニティの創出こそが大土町における新しい価値の一つであると考えられる．

他方，受入れ側の二枚田氏にとっても来訪者との交流から刺激を得て，地域への魅力をあらためてとらえ直し，今後に向けて可能性を感じたり，集落維持のための活動の原動力にも結び付いたりしている．このように外部の人々が関わっていくことは，地域の人口が減少し高齢化が進む中で，景観保全や集落機能を担う人材の補完が図られることに加えて，地域の住民の新たな刺激となって，小田切（2009）が指摘する「誇りの空洞化」を緩和し，地域づくりのモチベーションを高めることにつながる可能性が期待される．ただし，大土町では広義の地域住民である他出者において，外部からの人々に対し無関心を抱いたり，交流が極めて少ないという現状があった．両者の交流から生まれるかもしれない創発的効果を念頭に置けば，今後の地域づくりの可能性を広げるために検討の余地がある課題であろう．

大土町ではボランティア参加者の受入れ団体として一般社団法人おおづちが設立されたものの，依然として二枚田氏という個人が中心人物として「人と人」そして「人と地域」をつなぐ役割を果たしており，そのマネジメントに期待されている面が強い．二枚田氏との個人的なつながりで関係人口の裾野は広がった一方で，より深く集落に関わっていく人材を生み出すことが求められるであろう．地域づくりの継続には，受入れ側が将来的に担い手を確保すること，広義の地域住民とボランティア参加者が共に理解しあって活動を続けていける体制をつくることが求められると考察する．

謝辞　本稿の作成にあたっては，住民の二枚田氏をはじめ，大土町に関わる皆様から多大なご協力を賜りました．心よりお礼申し上げます．また，論文作成のご指導をいただきましたお茶の

水女子大学地理学コースの宮澤仁先生，ならびに同コースの諸先生に感謝いたします．

注

1) 一般社団法人全国過疎地域連盟の報告に基づいている．なお，この報告において「過疎市町村」とは，過疎地域市町村，過疎地域とみなされる市町村，過疎地域とみなされる区域のある市町村の合計のことを指す．

2) 総務省「これからの移住・交流施策のあり方に関する検討会中間とりまとめ」による．https://www.soumu.go.jp/main_content/000481869.pdf（最終閲覧日：2024年２月10日）

3) 一方で，現在，東谷地区の他集落の中には新規の移住者がみられる集落もある．

4) 二枚田氏に関しては，本人の承諾を得ているため，本論文では実名を公表する．

5) 石川県のwebページ「加賀市加賀東谷伝統的建造物群保存地区」による．https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/bunkazai/denken/6.html（最終閲覧日：2024年２月10日）

6) 2006年５月に，東谷地区の住民や地区に関係を持つ22名により東谷地区保存調査準備会が設置され，全国の重伝建地区の視察や勉強会などの活動を続けてきた．2008年６月には山中温泉ひがしたに地区保存会にあらためられ，重伝建地区指定後も野菜市や古道整備，地区座談会などの活動を行っている．また，2007年と2008年には，東谷地区の住民と学識経験者などから構成される加賀市山中温泉加賀市東谷地区保存対策調査会が国庫補助を受けて保存対策調査を実施し，現存状況に基づいた保存地区範囲の設定，保存計画案の策定，修理・修景の基準および今後の整備計画案の策定等を行った．なお，上記調査の結果は，加賀市山中温泉東谷地区保存調査準備会（2007）に取りまとめられており，本論文のⅡを執筆する上で参考にした．

7) ただし，大土町の家屋は，1937年の大火の後に再建されたものであり，それ以前の屋根は茅葺であった．

8) 一般社団法人おおづちより提供を受けた「一般社団法人おおづち　令和２年度事業報告」による．

9) 外国国籍の２名に対しては，筆者が英語でインタビューを行い，語りの引用に際しては筆者が和訳した．

文献

小田切徳美 2009.『農山村再生－「限界集落」問題を超えて』岩波書店.

加賀市教育委員会 2019.『加賀市加賀東谷伝統的建造物群保存地区保存計画（平成31年１月30日変更告示)』. https://www.city.kaga.ishikawa.jp/material/files/group/92/hozonkeikaku.pdf（最終閲覧日：2024年２月10日）

加賀市山中温泉東谷地区保存調査準備会 2007.『歴史と生活の足跡－風雪に耐えてここに光を』加賀市山中温泉東谷地区保存調査準備会.

作野広和 2016.地方移住の広まりと地域対応－地方圏からみた「田園回帰」の捉え方．経済地理学年報 62: 324-345.

宮口侗廸 2007.『新・地域を動かす－一地理学者の地域づくり論』原書房.

山中温泉ひがしたに地区保存会 2007.『重伝建地区 加賀市加賀東谷－赤瓦と煙出しの里』山中温泉ひがしたに地区保存会.

はらだ・ももこ（72期卒）

Community Building in a Village with a Population of One Person and Creating Related Populations: A Case Study of Ozuchimachi, Yamanaka Onsen, Kaga City, Ishikawa Prefecture

HARADA Momoko